

県内主要古墳の調査(Ⅲ)

—戸場口山古墳・中の山古墳範囲確認調査—

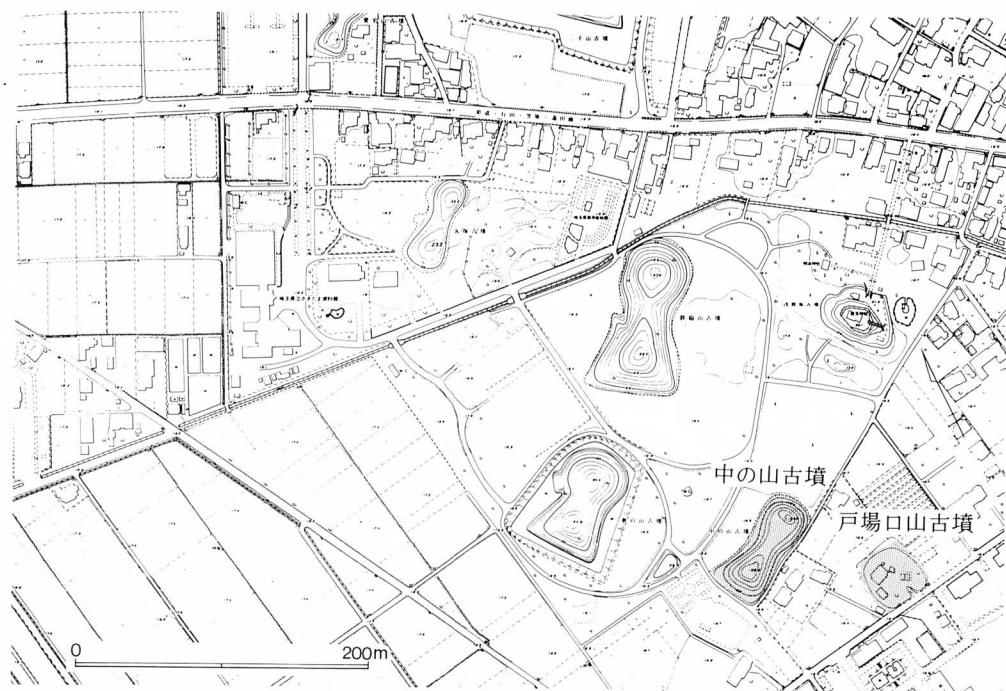
県立さきたま資料館

1 調査の経緯

さきたま資料館では、埼玉古墳群を理解し研究を進展させるためには、県内の主要古墳の調査が不可欠であるという理由で、昭和61年度から県内主要古墳の調査を実施してきたところである。昭和63年度には埼玉古墳群内の主要古墳であり、かつて渡柳の3古墳（戸場口山古墳・中の山古墳・奥の山古墳）の一基と唱われながら、古く削平されたために内容の不明であった戸場口山古墳の調査を実施する運びとなった。昭和63年度の第1次調査の成果は既に県内主要古墳の調査（Ⅱ）として『調査研究報告』第2号に発表済みであるが、大型の方墳となる可能性が明らかとなったため、平成元年度に第2次調査、平成2年度に第3次調査を行った。その結果、古墳の規模や形態、そして周堀の構造などが明らかとなったほか、西側に隣接する中の山古墳との前後関係も確定した。現在、戸場口山古墳は民有地であり、いろいろな制限のある状況下においては、一応、所期の目標を達成できたと考え、今回、図面と出土資料の整理も完了したので、調査成果を公表することとした。

本調査の報告に当たっては、発掘調査年度後に転出した谷井彪、駒宮史朗、大和修の各氏にも助言・協力を得た。感謝申し上げたい。

（若松良一）



第1図 調査古墳の位置図

2 トレンチ調査

昭和63年度に戸場口山古墳の西側に第1トレンチを設定して調査を行い（報告済）、平成元年度に古墳東側に第2・3トレンチを平成2年度には中の山古墳と戸場口山古墳の間に第4・5トレンチおよび西北隅に相当する部分に第6トレンチを設定して調査を行った。

（1）平成元年度

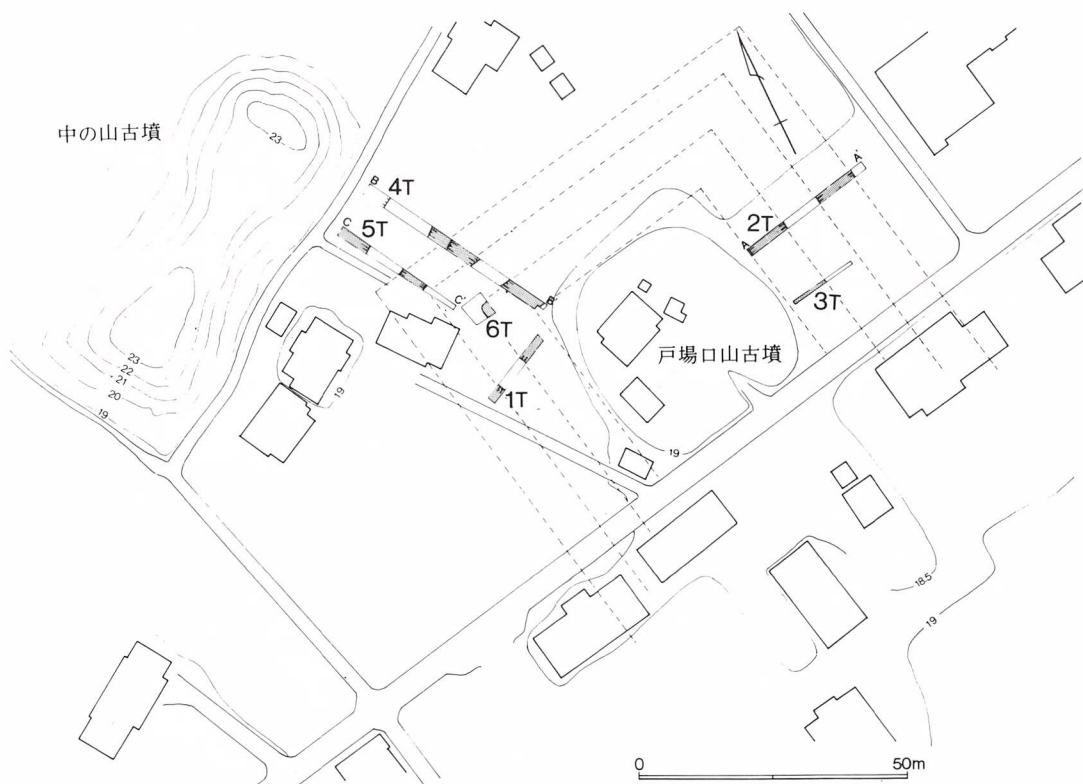
第2トレンチ

戸場口山古墳の東側の堀の状況を確認するために設定した、幅約1.5m、長さ25mのトレンチである。トレンチの最も西側では戸場口山古墳の墳丘から周堀への傾斜面を検出し、旧表土の上に版築状に盛土を施した痕跡を確認した。また中堤部も旧表土上に盛土を施しており、上面は削平されていたが、約50cmの盛土が残存していた。周堀内にロームを主体とした堆積土がみられるが、これは中堤の盛土が崩壊したものと推定される。第2トレンチで検出した内堀堀方の上端は7.7m、下端は7.0m、最深レベルは16.8m、中堤の幅は7.0m、外堀の堀上の堀方上端は8.0m、下端は6.5m、最深レベルは17.0mである。

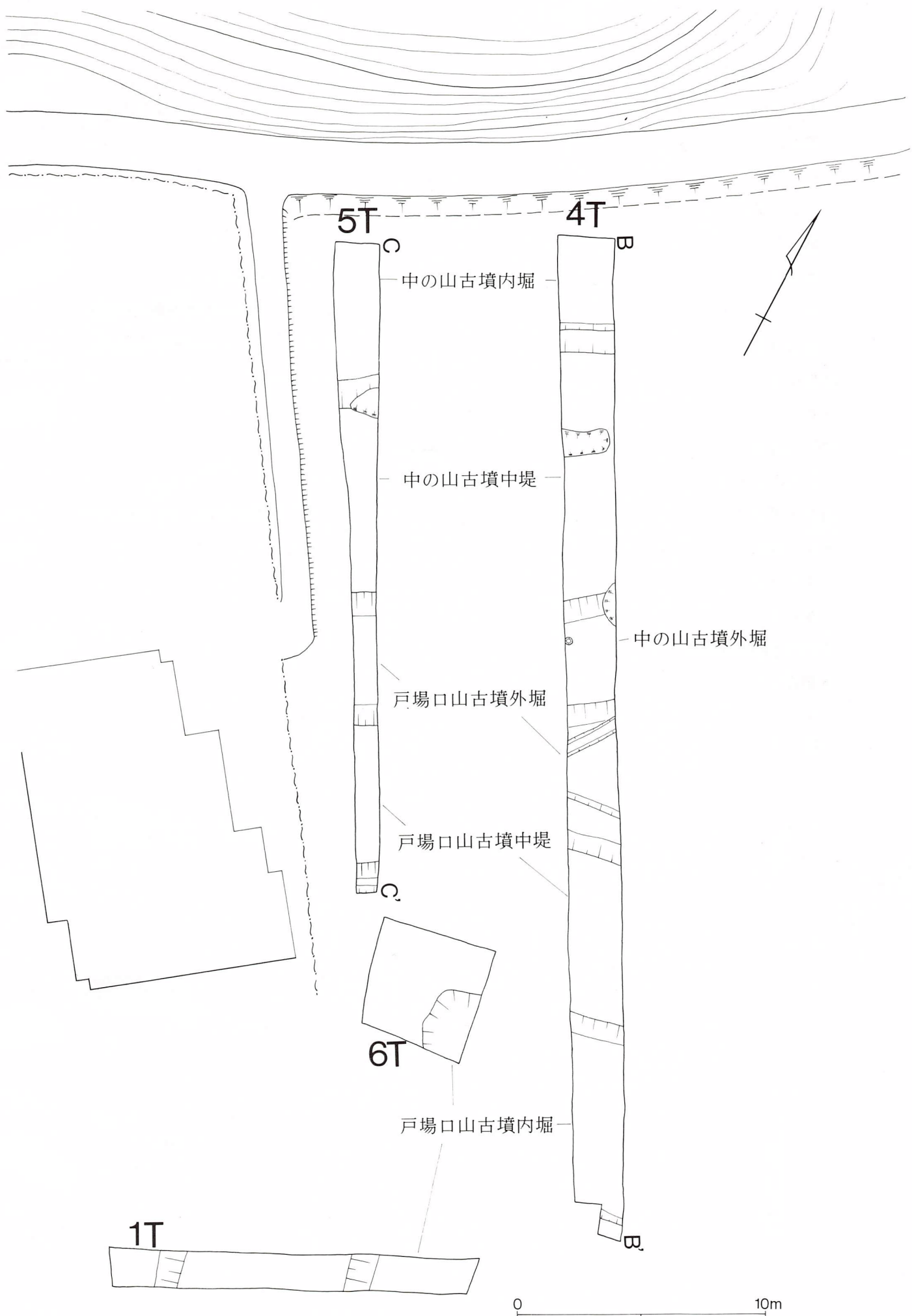
遺物はほとんどなかったが、外堀の床面付近から須恵器の甕（第6図-1）が出土している。

第3トレンチ

第2トレンチの南約10.5mのところの内堀の方向を確認するため、幅約50m、長さ12.5mのトレンチ



第2図 トレンチ設定図



第3図 第1・4・5・6トレンチ平面図

ンチを設定した。トレンチ西側から6.7mは内堀部分に相当し、墳丘東側の内堀の方向が判明した。遺物は出土しなかった。

(2) 平成2年度

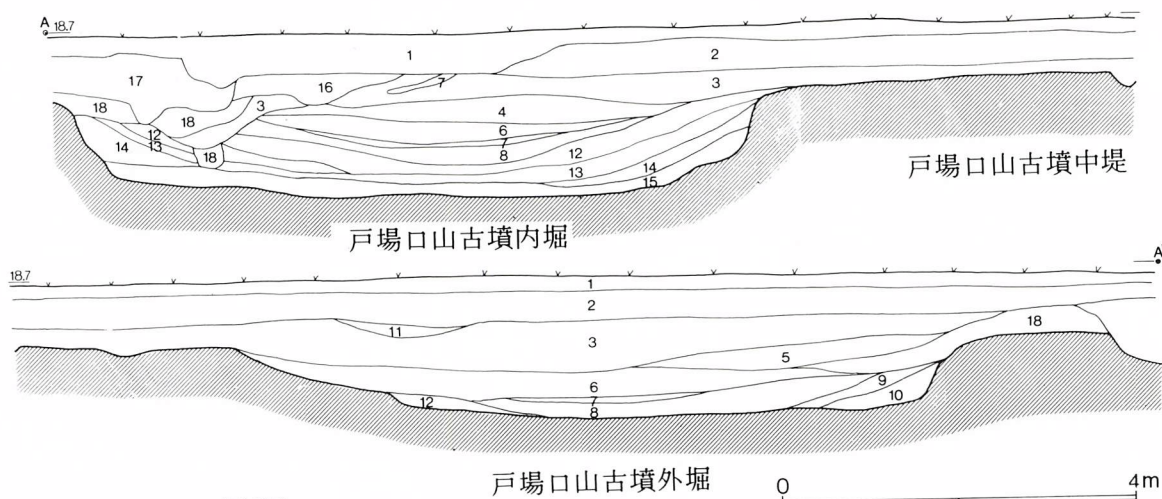
第4トレンチ

中の山古墳の後円部東側から戸場口山古墳の西北隅に至る、幅約2m、長さ約40mのトレンチである。トレンチ北端から5.8mは中の山古墳の内堀部で中の山古墳中堤、中の山古墳外堀、戸場口山古墳外堀、戸場口山古墳中堤、戸場口山古墳中堀と推定される遺構が、北から順に検出された。特に中の山古墳の外堀と戸場口山古墳の外堀は重複しており第5図の断面図では重複部に後世の溝がかかっているためその前後関係がわからないが、トレンチ対面の断面では戸場口山古墳の外堀が中の山古墳の外堀を切って造っていることが明らかとなった。

戸場口山古墳の中堤はローム面を土手状に掘り残した後で、斜面にロームと粘土を交互につき固めて堤表面の保護をしていたのは、第1トレンチで観察されたのと同じ状況である。また堀底は一度粗く掘削した後に、ロームをつき固めて整形している。中堤から外堀の斜面の部分も、堀内にロームを主体とした土層が流れこんでいることから、本来は版築などが施されていたと考えられる。

第4トレンチで検出した中の山古墳の内堀最深レベルは17.3m、中の山古墳の中堤は幅10.0m、中の山古墳外堀は検出面で幅4.8m、最深レベル17.5m、戸場口山古墳外堀は検出面で上端幅4.2m、下端幅3.7m、最深レベル17.0m、戸場口山古墳中堤は幅8.0m、戸場口山古墳内堀は上端幅7.7m、

第2トレンチ

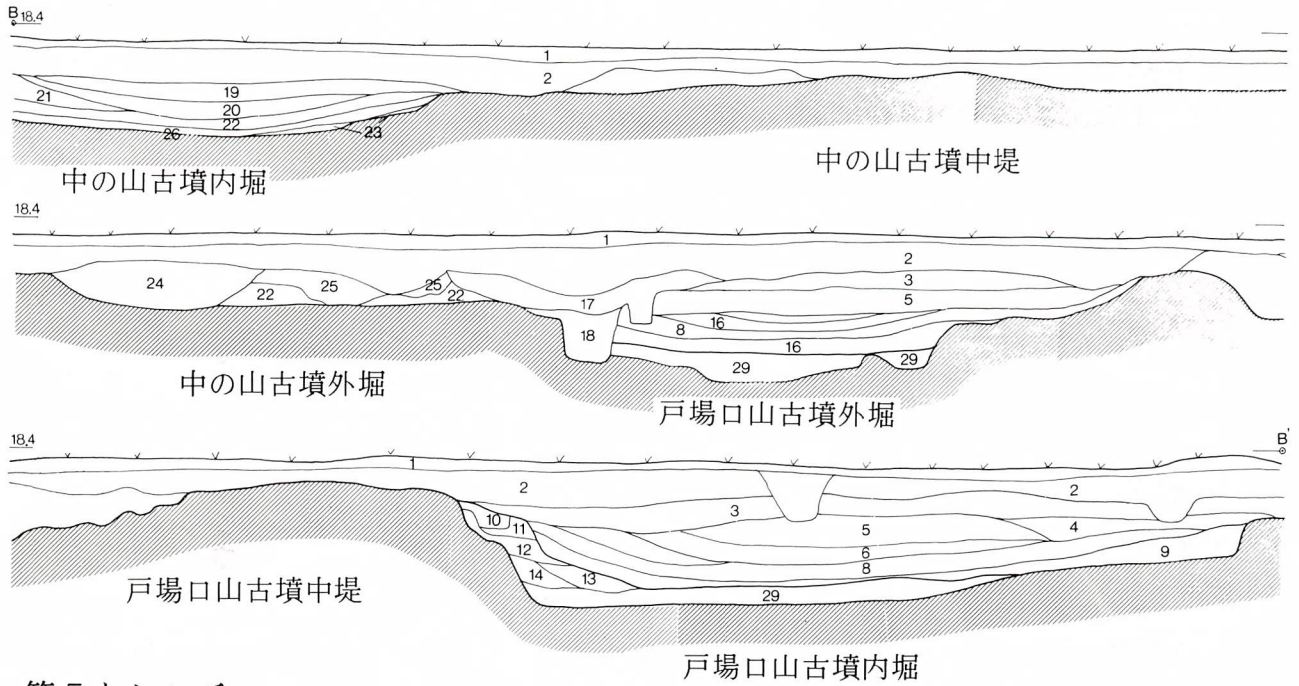


【第2トレンチ土層註】

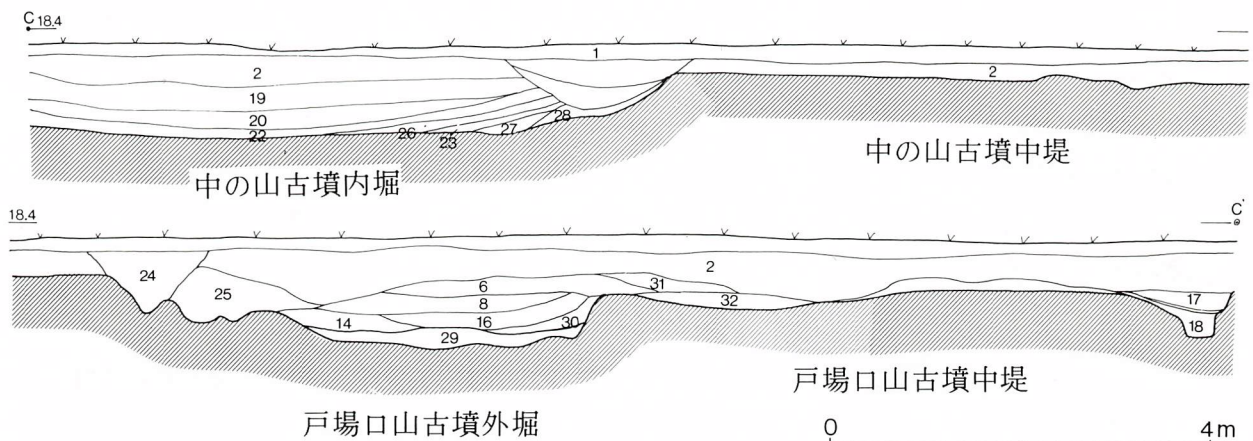
- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 表土 (耕作土) | 10 黄褐色ローム (鉄分を含んだブロックが混入) |
| 2 ロームブロックと粘土ブロックの混入土 | 11 粘土ブロック |
| 3 褐色粘質土 | 12 黒褐色粘質土 (ローム粒子を多く含む) |
| 4 褐色土 (ロームの微粒子を含む) | 13 黒褐色土 (粘土含む) |
| 5 褐色土 (ロームブロックと黒色ブロック含む) | 14 褐色土 (ローム粒子とロームブロック含む) |
| 6 暗褐色土 (ローム微粒子を含む) | 15 黒色土 (ロームブロックと粘土微粒子含む) |
| 7 黒色土 (火山灰を含む) | 16 褐色粘質土 |
| 8 黒褐色土 | 17 褐色土 (粘土ブロックとローム微粒子含む) |
| 9 黄褐色ローム | |

第4図 第2トレンチ断面図

第4トレンチ



第5トレンチ



【第4・5トレンチ土層註】

- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1 表土 (耕作土) | 17 灰黄褐色土 (溝覆土上層 軟質) |
| 2 暗灰黄色土 (旧耕作土) | 18 灰黄褐色土 (溝覆土下層 上層にパミス含む) |
| 3 暗褐色土 (ローム粒子と炭化物粒子を含む) | 19 黒褐色土 (ローム粒子と砂粒含む) |
| 4 暗褐色粘質土 (ロームブロックと黒色土ブロック含む) | 20 黒褐色土 (上層にパミスを部分的に含む) |
| 5 黒褐色土 (ローム粒子と黒色土ブロック含む) | 21 暗褐色粘質土 (ローム粒子を多く含む) |
| 6 黒褐色粘質土 (上層に黒色土と砂粒を含む) | 22 暗褐色粘質土 |
| 7 暗褐色粘質土 (細かいローム粒子を少し含む) | 23 暗褐色粘質土 (ハードロームブロック含む) |
| 8 暗褐色粘質土 (ローム粒子多く含む) | 24 にぶい黄褐色土 (軟質) |
| 9 暗褐色土 (ローム粒子と灰黄褐色粘土ブロックを多く含む) | 25 にぶい黄褐色土 (2層の土をブロック状に含む軟質) |
| 10 黄褐色土 (径約2cmのハードロームブロックと暗褐色ブロックを含む) | 26 暗褐色粘質土 (2層よりもやや暗い) |
| 11 灰褐色粘土 (ハードローム含む しまり強い) | 27 黒褐色土 (ハードロームとブラックバンド・ロームが混じる) |
| 12 暗褐色土 (黄褐色ロームブロックと暗褐色ロームが混じる) | 28 にぶい黄褐色ローム (ハードロームブロック含む) |
| 13 暗褐色土 (暗褐色ロームを多く含む) | 29 黄褐色ロームブロックと黒褐色土ロームブロックの混じり (つき固められたように非常に固い) |
| 14 黒褐色土 (暗褐色ローム、黒色土、黄褐色ロームが互層になる) | 30 黄褐色土 (黄褐色ロームブロックを多く含む) |
| 15 暗褐色土 (粘土含む) | 31 暗褐色土 |
| 16 にぶい黄褐色土 | 32 暗褐色土 (ローム粒子多く含む) |

第5図 第4・5トレンチ断面図

下端幅6.6m、最深レベル17.0mである。

遺物は中の山古墳の内堀から須恵質埴輪壺や須恵器甕の破片が多く出土しているが、中の山古墳の外堀や戸場口古墳からは、ほとんど出土していない。

第5トレンチ

第4トレンチの西側約7mに、第4トレンチと平行して設置したトレンチで、幅は1～2m、長さは26mである。トレンチ北端から6.6mは中の山古墳の内堀部で、中の山古墳の中堤、戸場口山古墳外堀、戸場口山古墳中堤を検出した。第4トレンチと検出した中の山古墳の外堀は、ここでは確認されなかった。おそらくは戸場口山古墳の外堀と重複しているものと考えられる。戸場口山古墳の中堤では、版築状況はみられなかったが、ロームブロックを含んだ層が堀に流れ込んでいることから、第4トレンチと同様に版築が行われていたことが推測される。

第5トレンチで検出した中の山古墳内堀の最深レベルは17.3m、中の山古墳の中堤は幅7.2m、戸場口山古墳外堀の上端幅3.6m、下端幅2.7m、最深レベル17.3m、戸場口山古墳中堤は幅6.8m以上である。

遺物は中の山古墳内堀から須恵質埴輪壺や須恵器甕の破片が出土しているが、その他ではほとんど出土していない。

第6トレンチ

第5トレンチの南側約1mに、一辺約5mの方形のトレンチを設定し、戸場口山古墳の内堀西北隅を確認した。遺物は出土しなかった。

以上のトレンチ調査の結果から、第2図のような復原案を作成した。第3図では平面図などでは、検出した堀の方向がややずれているが、遺構が浅いことから、上面がかなり削平されていることにも起因するものと考えられる。これによると、戸場口山古墳の墳丘は一辺42m、内堀幅7.2m、中堤幅6.2～7.4m、外堀幅5.8～7.4mである。 (岡本健一)

3 出土遺物

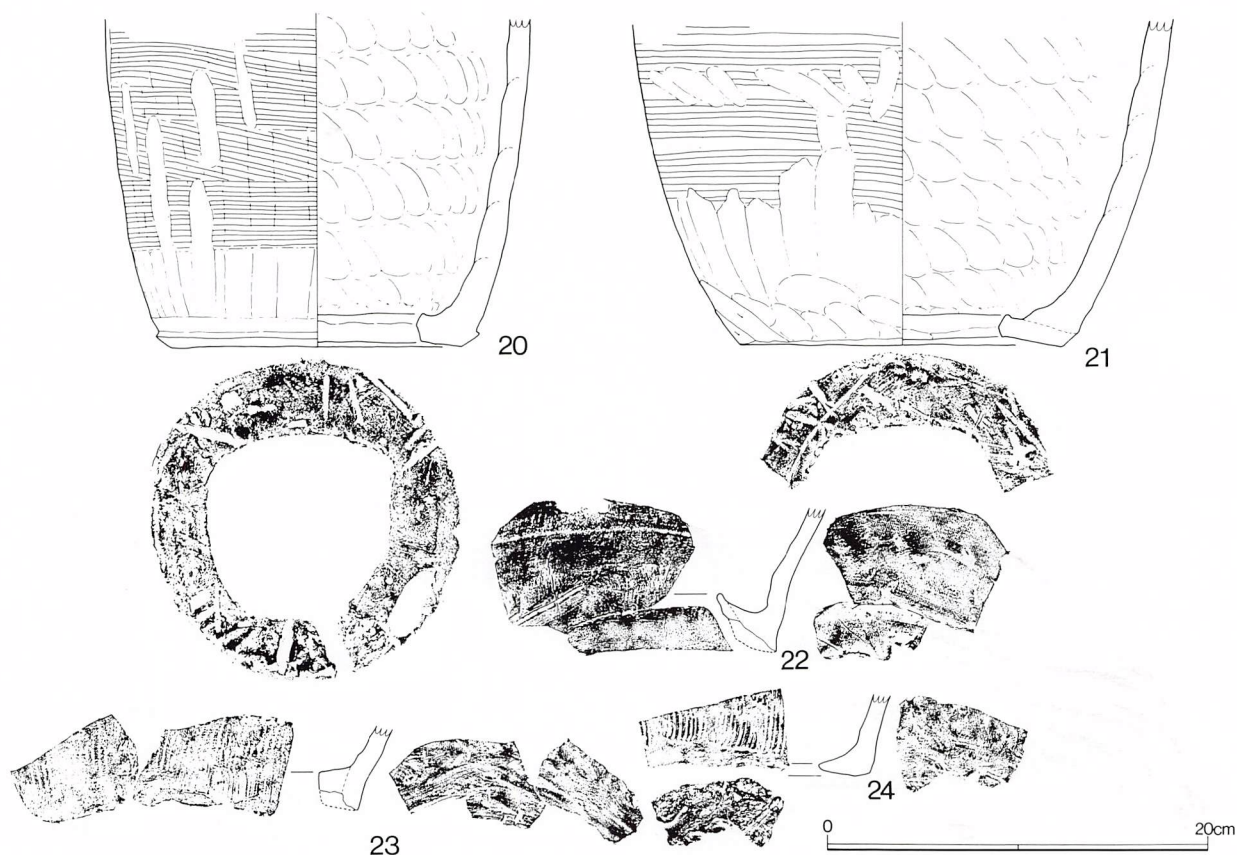
戸場口山古墳 (第6図-1)

戸場口山古墳の堀や中堤から出土した遺物はほとんどなく、第6図-1の須恵器甕が第2トレンチの外堀部分から出土した他は、中の山古墳から出土するような須恵質埴輪壺片や、平安時代の須恵器片、縄文時代の打製石斧などが少量出土しているが、いずれも混入遺物と考えられる。

第6図-1は唯一確実に戸場口山古墳に伴うものである。口縁部と底部を欠いているが、頸部から胴部にかけては、ほぼ完存している。頸部は大きく外反して開き、肩部はやや張り気味で、胴部は全体的に倒卵形をしている。頸部外面はヨコナデ調整、胴部外面は表面を格子目タヌキを施した後、胴部上半から肩部にかけては、ヨコナデ調整を行っている。内面は頸部と胴部のつなぎ目や、肩部は指押さえで成形した後、ヨコナデ調整を行い、胴部は無文の押さえ具痕の上から軽くナデ調



第6図 出土遺物 (1)



第7図 出土遺物(2)

整を行っている。色調は暗青灰色を呈し、胎土は緻密で、針状物質等は含まれていない。頸部のくびれ部径は12.8cm、胴部最大径は23.2cm、現存高は25.6cm、である。

中の山古墳(第6図-2~19、第7図)

第6図-13のみが第4トレンチの外堀部上層から出土したものであり、他はすべて第4・5トレンチの内堀から出土したものである。

第6図-11が須恵器甕の頸部、12が須恵器甕の肩部である以外は、すべて須恵質埴輪壺である。須恵質埴輪壺は中の山古墳の報告書中で、基本的に次のように分類されている。A類-ラップ状に開く頸部にはカキメ調整をし、胴部はタテヘラナデの後にカキメ調整を行う。B類-形態はA類と同様だが、カキメ調整をせずヨコナデを施す。朝顔形円筒-頸部がA・B類に比べて長く緩やかに外反する形態で、タテハケを施した後に櫛描波状文や凹線が施文される。胴部中程には円形の透孔があり、胴部の調整は全体的にタテハケを施している。第6図-3・4・16・19・第7図-20・21がA類、第6図-2・5・6・17・18がB類、第6図-7・8・9・10・13・15・第7図-23・24が朝顔形円筒に相当する。これらの中で第6図-14は以前の調査ではみられなかった遺物で、おそらくは須恵質埴輪の肩部に相当する箇所に「つ」の字状の凸帯を貼付するものである。表面はタタキ目を施し、縄蓆文状に一定間隔で凹線状のヨコナデを行っている。この破片以外には1片も出土していないので数量は少ないようだが、注目される遺物である。(岡本健一)

4 調査の結果

前節までに調査の概要を記述したが、本節では調査で判明した事実から考えられる戸場口山古墳・中の山古墳に関する考古学上の問題について二・三、検討してみたい。

(1) 戸場口山古墳・中の山古墳の前後関係および年代について

戸場口山古墳と中の山古墳は東西に隣接して所在している。古墳時代においては、前方後円墳が終焉を迎えた後、方墳が首長墓の主体になることが常識的に考えられているため、中の山古墳の築造が戸場口山古墳に先行するのは当然のことと考えられてきた。

昭和62年に、中の山古墳の周堀確認のトレンチ調査が行われ、既に円筒埴輪が樹立されず、須恵質埴輪壺がその代わりに立て並べていたことが判明してからは、中の山古墳が前方後円墳の終末期に位置付けられるようになり、方墳と伝承されていても墳形の確定していない戸場口山古墳との前後関係は問われなければならなくなった。両古墳の間の2本を含めて6本のトレンチを戸場口山古墳に入れた今回の調査は、埼玉古墳群の終焉の歴史的意義を考えるためには必要不可欠なものであり、学問的にも緊急性のある課題の解決に役立つものとする。

今回報告した第4トレンチ・第5トレンチにおいて、中の山古墳の外堀と戸場口山古墳外堀の重複が明らかになり、しかも、戸場口山古墳の外堀が中の山古墳の外堀を破壊して造成されていたらしいことが確定したわけである。ここで残る問題は、たとえ周堀の問題であるとはいえ、戸場口山古墳の築造を命じた首長はなぜ前代の首長の墓の一部をこわして自分の墓を築こうとしたのかであるが、これは考古学的手法のみで解決すべき問題ではないので、この報文では触れないことにする。

また、数少ないとはいえ、出土遺物があるので、年代の問題を避けて通ることはできない。そこで、次は遺物や石材の問題から戸場口山古墳の年代考定の糸口を見いだしてみたい。

戸場口山古墳に確実に伴うと見られるのは第6図1の須恵器甕1点のみであることは前節に示したとおりである。この甕の年代を古墳の年代としてよいかどうかは、外堀出土という位置からは決め手にならないとする向きもあろうが、堀底付近からの出土なので古墳の年代を指示するものとして扱う。

古墳時代の須恵器甕は通常大小3種類ぐらいのバリエーションがある。戸場口山例は最も小型の部類であろう。ただし、古墳時代の甕は大型が主体であり、小型甕は平底甕が出現するまでは、主体的器種にならない。したがって、この甕の年代を確定することは容易ではない。

もっと細かな要素から考えてみよう。まず、調整手法がある。頸部から胴部上半にかけてきれいなロクロナデが施され、胴部内面の当て道具痕跡が無文化している。これらは新しい特徴で、奈良時代以降の須恵器甕に継承されていく。それに対して胴部中位から下半の外面に残るタタキ目は、木製柂目板の表面の年輪の条に対してやや斜めになる方向に細い溝を平行に何条か刻み付けた原体によるもので、6世紀後半以降にはよく見られるものである。伝統的手法と考えてよい。この甕の年代を6世紀後半～8世紀の中で考えてよいことになる。

次に、器形の特徴から考えたい。口縁部をほとんど欠失しているが、やや広口気味になるのはやはり新しい特徴である。肩が張り出し、径に対してやや間延びした長胴形態であるが、大型甕なら、川越市牛塚古墳、長瀬町上ノ台4号墳に類似したものがある。この2基は7世紀初頭から前半あた

りの時期にあたりと考えられる。したがって、7世紀前半あたりに年代の位置付けを絞る根拠にできるかもしれない。

憶説を重ねてきたが、戸場口山古墳の甕の年代は7世紀前半頃とするのがいちばん妥当な結論ということになる。これならば、埼玉古墳群最新の前方後円墳である中の山古墳を7世紀初頭に置き、その次に築造されるとする現在の常識的な考え方と矛盾も少ないであろう。

さらに、石材の問題である。『調査研究報告』第2号の駒宮史朗報文にも示されたように、戸場口山古墳石室用石材と推定されているものは、凝灰質砂岩の石材である。表面に幅5cm程度の工具痕が残るが、工具を動かすストロークが概して小さく、削り取りも小さかったであろう。つまり、石材平面を変形させずに、平らな壁体に仕上げるような工事を行った結果であろう。比企地方に知られる凝灰質砂岩使用の横穴式石室は大半が胴張りプランになっているが、石材表面を大きく変形して胴張りのカーブを作りだすため、かなりザックリ削られたものが多いように記憶している。工具のストロークが大きく、削り取りの最も多い工事の結果である。

凝灰質砂岩使用の横穴式石室は、胴張りのものが古く、羽子板状や箱形のものに推移する傾向がある。胴張りプランが盛行するのは、7世紀初頭から前半の時期である。当然のことながら、戸場口山古墳の石室は既に胴張りプラン盛行期を過ぎてからのものと考えることができる。

これを逆に年代の下限の傍証と考えてみたい。つまり、7世紀中葉を少し過ぎたところまで、年代考定の幅に入れて考えておくということである。

(2) 戸場口山古墳をめぐる諸問題

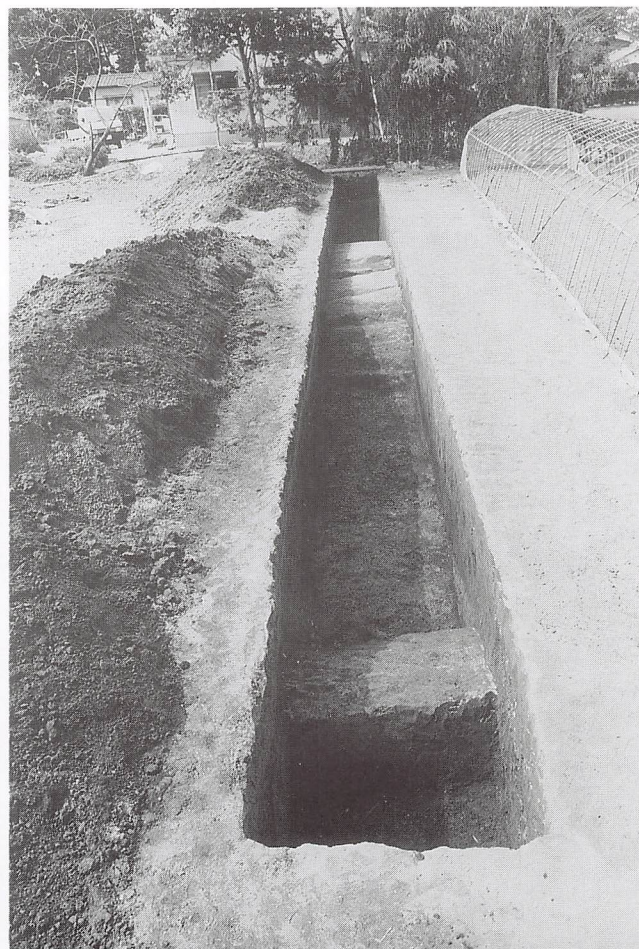
前節に報告したように、戸場口山古墳は一辺42mで二重周堀を有するやや大型の方墳である可能性が強まった。埼玉県には確実な方墳は少なく、おそらく古墳時代後期後半～終末期にあたるものは行田市地蔵塚古墳（一辺28m）、小川町穴八幡古墳（一辺31m）、吉見町茶白山古墳（一辺28m）あたりになるであろう。これに対して、7世紀前半～中葉の大型円墳として行田市八幡山古墳（径80m）、児玉町庚申塚古墳（径60m）などの存在も見逃せない。これら以外にも優秀な遺物を副葬品としていたり、複室構造の横穴式石室を内蔵するものは円墳が多い。首長層の墳形選択に方墳＝蘇我氏系と円墳＝反蘇我氏系という結集勢力のせめぎあいを見ようとしたのは白石太郎氏であった（「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集）が、北武蔵においても何らかの権力闘争の反映としてこの事実を解釈することはできるかもしれない。房総においては栄町竜角寺岩屋古墳（一辺80m）とその周辺、松尾町駄ノ塚古墳（一辺60m）周辺、富津市割見塚古墳（一辺40m）周辺、上野地域では前橋市総社古墳群の3基（一辺40～60m級）など権力を集中する首長像を考えがちになるが、むしろ円墳に凌駕されてしまい、没落の一途をたどる伝統勢力という位置付けをあたえられるのが戸場口山古墳が暗示するイメージとしてよいのではなかろうか。しかしながら、二重周堀がめぐる方墳というのも多くはなく、房総の諸例から考える限り、国造クラスの首長層にあたえられたひとつの「格式」のようなものを感じさせる。（利根川 章彦）



中の山古墳からみた戸場口山古墳と第4～6トレンチ



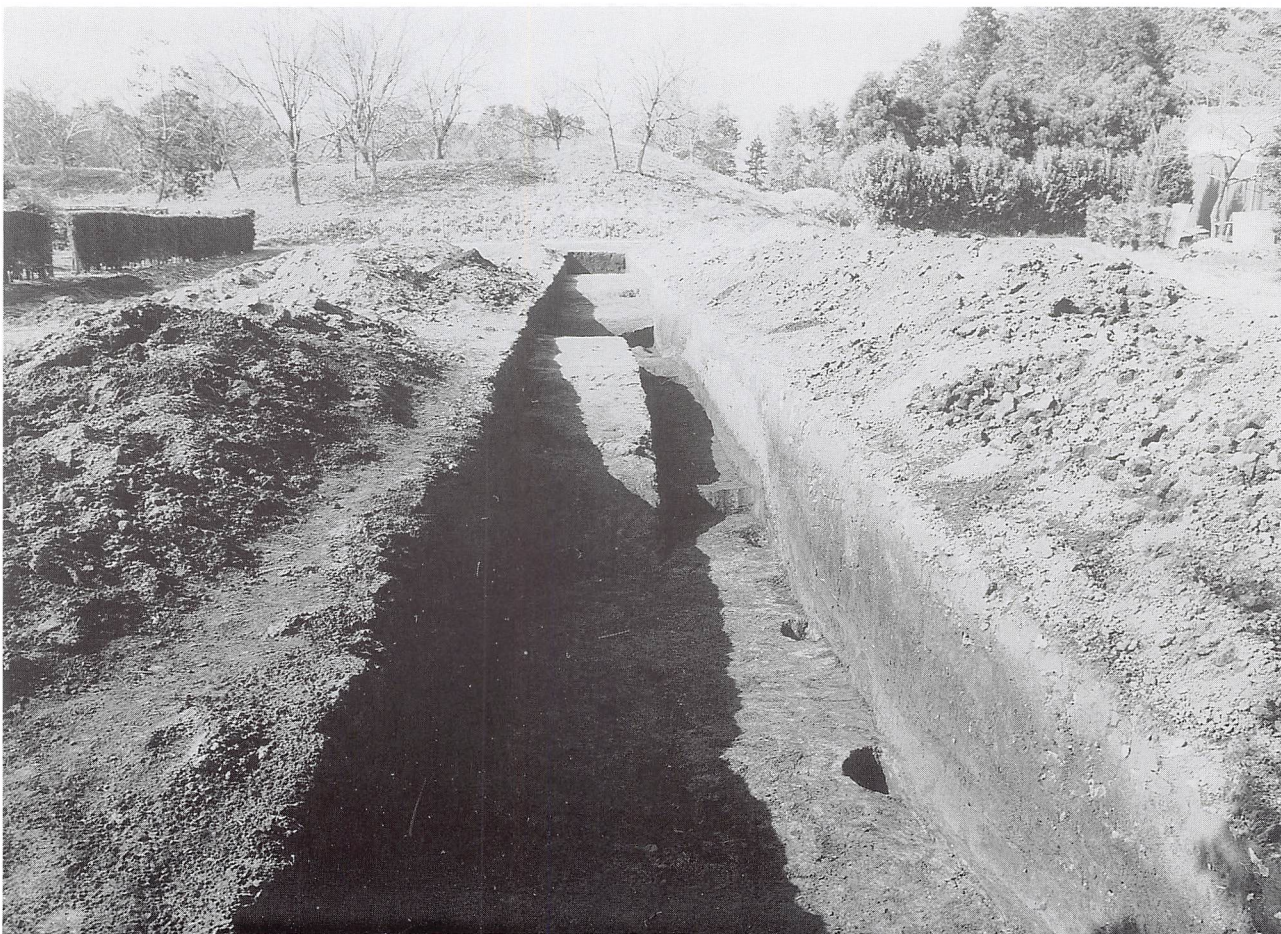
第2トレンチ（西から）



第2トレンチ（東から）



第4～6 トレンチ (戸場口山古墳から)



第4 トレンチ (戸場口山古墳から)



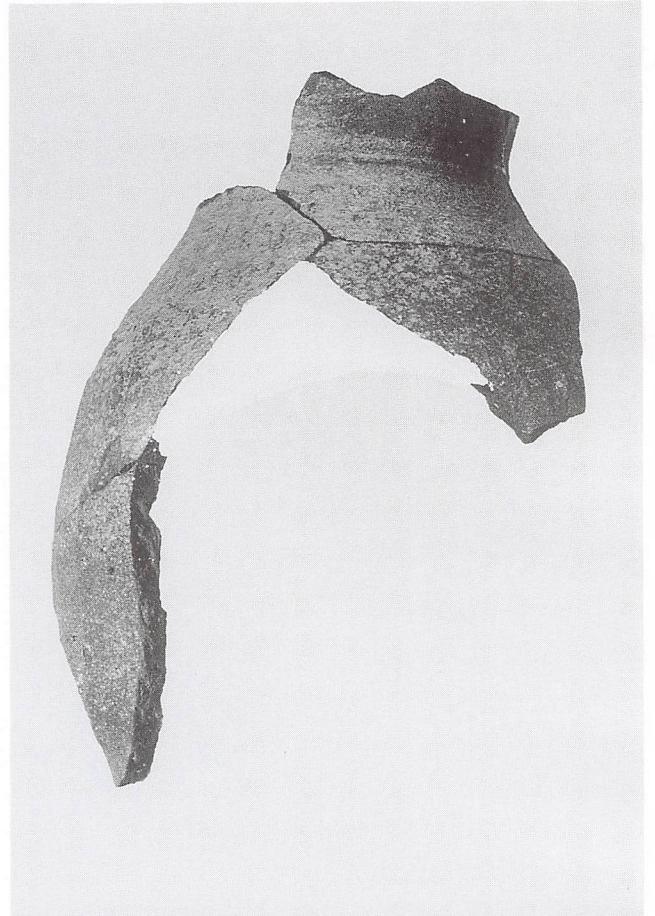
第5 トレンチ (中の山古墳から)



第6 トレンチ (北から)



戸場口山古墳出土 須恵器甕



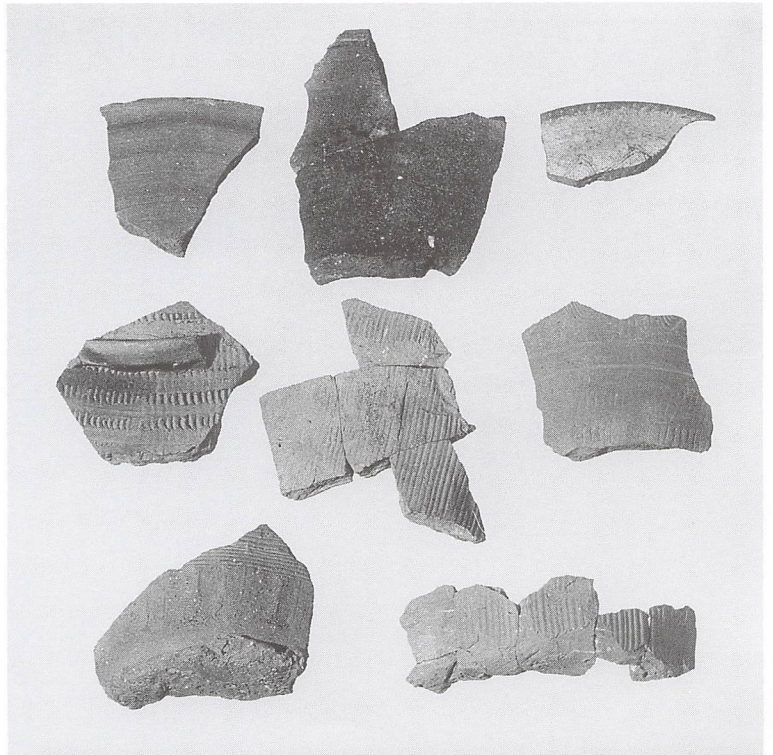
中の山古墳出土 須恵質埴輪壺



中の山古墳出土 須恵質埴輪壺



中の山古墳出土 須恵質埴輪壺



中の山古墳出土遺物